甲状腺外科草子 127
哲人宰相：大平正芳余話①

杉野　圭三

大平正芳（1910 -1980）は第 68，69 代総理大臣を務めたが、その口調から生前「アーウー宰相」や「鈍牛」と揶揄され、盟友「田中角栄」の金権問題から批判を受けることも多かった。しかし、選挙最中の悲劇的死後、その誠実さや哲学的政治理念が高く再評価されている。

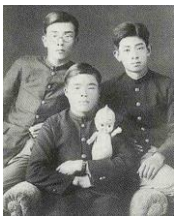
大平の政治活動は大蔵省に入り、**池田勇人**の知遇を得たことに始まる。その後、**宏池会**に参画し内閣官房長官（第 21・22 代）、外務大臣（第 85・86・95・96 代）、通商産業大臣（第 29 代）、大蔵大臣（第 79・80 代）などの要職を務めることとなった。

1972 年の**日中国交正常化**は外務大臣だった大平の極めて大きな功績である。
ここでは大平の政治家としての経歴ではなく、本人の著作・残した言葉、周囲の人々の記録を中心にまとめることとした。

幼少期（左端）父と兄　　小学校６年（中央）

幼少期から大学時代まで

香川県三豊郡（現観音寺市）の農家の三男として生まれ、幼いころから内職を手伝って家計を支えていた。高松高等商業学校（現・香川大学経済学部）を卒業、就職したが、奨学金を得て、23 歳で東京商科大学（現・一橋大学）に進学、卒業後は大蔵省に入る。



高松高商時代　　ライシャワー氏と

高松高商時代にキリスト教と出会い、洗礼を受けている。一時は、牧師になって一生を伝道に捧げたいと思い、「僕は百歳まで生きて真理を探り究めたい」と、述べている。

大平と親交のあった駐日米大使**ライシャワー**氏は大平を、以下のように評している。
「大平は引っ込み思案であるように見えることによって目立つ人物であり、人の後に追随するように見えることによって人を指導する人物であった。これは、彼が未来についてのビジョンを持っていたからである。

かって大平は自分はクリスチャンだと言ったことがある。大平に、単なるポリティシャンではなく、**ステーツマン**となる人格と規範を与えたのは、このキリスト教的背景だったのではなかろうか（一部略）」

心の一燈　　**森田一氏**

女婿の森田一氏（衆議院議員、運輸大臣）は著書「心の一燈」の中で「大平は終生聖書を非常に愛して、スピーチにもよく引用していた。敬虔なクリスチャンだが洗礼のことに触れられるのを大変嫌がっていた。本人は無教会派のクリスチャンだとよく言っていた（一部略）」と述べている。キリスト教との関係は不明瞭なものもあるが、カーター大統領やライシャワー氏との友好的関係に大きな役割を果たしたのではないかと思われえる。

東京商大時代　　同卒論

学生時代の成績は一番ではなく、三豊中学の同級生は「大平君の成績は二、三番だったのじゃないかと思うのだけど、少なくとも俺の方がよくできた」と述べている。通産省の森誓夫氏も「自分の方が秀才だった」と公言し、あまり目立たない学生だったようだ。

しかし、奨学金を得て大学進学し高等文官試験に合格しているので、将来設計のできる努力家だったことは確かであろう。

参考資料：一億人の昭和史、三代の宰相たち（下）など

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2025 年 1 月 30 日